

「国土計画考」 - その29 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成20年12月26日（金）

場所：海運クラブ3階会議室

今野 全体の構成からいたしますと、「国土空間論」というのをつくってあります。調整の話がまだしり切れとんぼで残っていますけれども、次のテーマに行くとするところに入りますので、調整の話がもしあれば、と思いますが。

実は、国土空間論については前に部分的に議論しているところがございます。そういう意味では二番煎じみたいになりますが、全体の構成どおりに進めていくとすると、次は国土構造論です。1回では済まないと思いますが、議論としては一番肝心のところに行きますから、その前提として、国土空間をどういうふうにするかという議論をすべくまとめてきたのが、お手元に置いた資料です。

もう1つは、1枚ペラを追加しておきましたが、『沖縄の県民像』という本がございます。沖縄地域科学研究所というところで作った本で、これは東京では手に入らないもので、沖縄のローカルパブリッシュメントがやっています。その中で、沖縄の歴史をどういうふうに沖縄自体が判断しているかということ、1ページで要約されているところがあったものですから、そこだけをコピーしてまいりました。著者は沖縄の方でございます。沖縄地域科学研究所というのも琉球政府時代からあったシンクタンクでございます、ほとんどが沖縄の人で占められています。そこからコピーしてきましたが、これは後ほど使わせてもらいます。

そのあとに、カラーの地図を数枚用意しておきました。順不同で綴じ込んでありますので申し訳ないですが、まず最初に「19世紀から1930年までの東アジア」というのがカラーであります。これは実は、最後のページに中国の国土がどういうふうになってきたかということを経史的に並べるために準備したも

ので、1つはBC 174年頃、キリスト誕生以前、ローマがあんなに大きくなる前の段階のもの。下が8世紀、次が15～16世紀のアジア。その前にある、ちょっと大きいものは、「モンゴル帝国時代のアジア」ですから、歴史的に並べればこれは4枚目になると思います。「19世紀から1930年までの東アジア」というのは、清が滅びる寸前の状況です。

もう一つ、「ハンザ同盟とその商業圏」は、ドイツとバルト海の関係を見ようと思って、この2枚のカラー写真を入れてあります。いずれもウェスターマン社という、イギリスの地図専門の出版会社で出しております『世界歴史地図』です。いまや古典になっていますけれども、1962年ですから、もう40年以上前のものから引っ張り出してきました。

その次に「中国の民族」の図面がございます。これも中国の出版社で出したものを持ってきました。「1930年までの東アジア」の下に中国地図出版社とありますが、これは政府直営の出版社です。そこで出したものを、どのくらい版權を払ったかわかりませんが、日本の帝国書院というところが翻訳刊行権を取って作った図面で、そこから引用したのが、中国の民族分布図の図面と、「1930年までの東アジア」の下に、現在の中国政府が基本的な統計を公表する前の段階での年次、1967年ですから、鄧小平以前の封鎖していた中国時代に国内向けに総括していた経済の統計を参考までにつけておきました。

したがって、地図は、日本ではなくて海外の目で見たとときのアジアなりドイツというのを資料として付けておきました。

もとに戻りまして、課題を整理したものに從って進めていきたいと思います。

最初に、「Lebens Raum (民族居住空間)」をどう位置づけるかというのが、実は20世紀初頭にかなりいろいろ議論が世界的にありました。なぜかという、近代社会というのは民族国家を基本にして考えるというコンセプトができ上がりましたから、近代国家が誕生する、その国家の概念によって国土というのは全然変わってくるわけです。我々は国土、国土と簡単に言っております。あるいは、この間、栢原君が出した『日本人の国土観』という本も、まだ斜め読みしかしていませんけれども、国家論を十分に議論しないで国土論というのは成

り立たないと思いますので、いまの我々の議論としては近代国家を対象とせざるを得ないと思います。そうすると、Lebens Raumと、「国家とは何か」という出発点から出ていかななくてはならない、こんなふうに思っております。

したがって、簡単に日本人の国土観とか言いますけれども、国土の対象範囲である国土というのは、時代、歴史によってどんどん動いて変わっていくことがわかります。日本の場合は島国ですから、その辺が意外と大陸国家とは違って、固定的であった一面は否定できないのですが、そのためにこういう考え方をいろいろしないではないかと思えます、国際的な水準からしますと。それが一つです。

それから、中国の歴史を振り返りますと、統一国家ができて3000年近くの間、全国土、いわゆる漢民族のLebens Raumを前提にして議論を進めたときに、統一国家が誕生して一国で支配していた時代と、分裂している時代 - - 例えば春秋とか三国時代とか、いろいろ分裂していましたが、マクロに言うと、時間はほぼ同じ位です。統一国家で治まっていた時代と分裂中国時代と、同じくらい、3000年の間の1000年以上あるという状況です。そういう意味では、その変化を見てみるとかなりいろいろなことが言えるのではないかというので、今日、中国の地図を歴史的に5枚並べてみたということであります。

特に中国の場合、一番古いキリスト誕生以前の中国というのは、BC 174年頃のアジアというのがついていますけれども、秦に次いで漢ができて、漢の統一国家、第一号と言ってもいいわけですが（実は第二号ですが）、秦を引き継いだ漢の統治範囲というのは、南は長江、北は遼東半島までという範囲でございます。長江の南に現在の湖南省域、東に上海の南、浙江省までの区域、これが漢の範囲になっていて統一された、こういうことあります。

8世紀になると唐が統一国家として誕生するわけですが、唐のときにはシルクロードに沿って西に延びています。それから、いわゆる江南の地と呼ばれる長江以南が全部、統一国家の範疇に入るといって変わります。

15世紀になりますと、右のような形になりまして、北は遼東半島までというところは同じで、シルクロードに沿って西のほうに延びていると言えますが、

もう一つは、8世紀に比べて、多少、統一国家の統治区域の中に入ってしまったのがインドシナ半島の付け根の部分で、いまの雲南省。少数民族がたくさんいる雲南省と、昔、上ビルマと言ったのですが、ビルマの北のほう、この辺の上流部が中国の範疇に入るとい形になっています。

さらにモンゴルに統一国家ができ上がりまして、桁違いに民族をはるかに越えた形でユーラシア大陸の大部分を支配してしまうという形で、100年から200年の間を経まして、19世紀の東アジアになりますと、基本形としては、古代からの統一国家の範疇と、雲南と東北3省、これが中国の範疇に入って「中国」と呼ばれていたということです。結局、15～16世紀から19世紀までの間に、少数民族として最大であった満州族が漢化されてしまって、どんどん進んできているということが読み取れるわけです。

それは、当然、中国の基本的な経済構造が変化することのあらわれでもあるということが言えようと思います。例えば8世紀にしても15～16世紀にしても、ちょうど黄色くなっている統一中国の範囲というのは、気候学的に言うと、年間降水量500ミリ以上のところとほぼ一致しております。というのは、農耕文化としての中国というのが、民族発展の空間として獲得できるところは全部獲得したという形で、シルクロードに沿った形で西に延びているところまでが中国エリアになっている。こういうふうに言えるわけで、その最終的な姿が「19世紀から1930年までの東アジア」で、黄色くなっているところは雨量が年間500ミリ以上のところであります。歴史的には漢民族は、乾燥地帯には生活空間を持っていなかったと言えるわけです。

ところが、現在の統一中国は、「中国の民族」というので見ていただきますと、これは1949年に建国した中国で、それから固定されております。明らかに、東北3省の西半分から、内蒙古、新疆ウイグル、チベットという雨量の少ない乾燥地帯を全部権限の中に入れていく。そうした意味では、3000年の歴史の中で現在の統一中国というのは最大の範囲になっていると言っているのではないかと思います。

こうした地図の背景に、例えばチベットと北京政府との対立問題が歴史の中

で位置づけられてくる、こういうふうに言うことができると思いますし、新疆ウイグルとの問題もまさしくそのとおりで、新疆ウイグルの立場から、あるいはチベットの立場から、あるいは、モンゴル族の立場からすると、そういう中国側の国土の概念というのは、そう古くから固定的にあったわけではないということが言えると思います。

このことは実はローマの歴史をひもときますと、ローマがイタリア半島を統一したあと、地中海を全部なめる形で大帝国をつくります。制度は、共和制とか帝政とか、時期によって変わってきますけれども、なめるようになってからの統治システムは、ズバリ言うと、ローマ本国と属州というふうに塩野七生なんかは日本語に翻訳していますが、属州ローマと本土ローマ、こうなっているのと非常に共通しているところはないか。

そうした構造は、現在の統治システムの中でも、自治区という言葉と、単純に何々省と言っているところの違いとして生かしていると、中国政府みずからはそう言っております。結局、国土の概念からすると、周辺地域というのを一体どういうこととしてつかまえておけばいいのか、という問題が残ったままであります。

そこで、先ほどの沖縄のコピーに戻っていただきたいのですが、琉球というのは日本なのか、外国なのか。これは復帰のときも猛烈に議論されたことですが、第一にこの著者は、「沖縄文化の基盤は日本文化の一環に属し、人種的にも日本人に属するという事実に着目しなければならない」ということですが、日本とのつき合いは微妙で、単なる幕藩体制でつくり上げた、北海道の松前から薩摩までの構造とはだいぶ違う位置づけになるということが、歴史的なフレームワークとしてある。

そして、完全に日本の統治体制の中に入ってきたのは島津侵入事件が契機で、そのあとは、近代化のときに府県制の中にのみ込まれてきた琉球処分というのを經由して、近代日本の中に固定化されてきます。第二次世界大戦後の数十年間は、米軍統治という異常な事態を踏まえて、沖縄復帰によって初めてそれが安定化するという時代でありまして、これは日本にとりまして、周辺地域の

問題というのは存在していた、このように考えていいのではないか。大国の間に挟まれた周辺地域として位置づけられていた琉球政府は、江戸幕府に対しても、清、中国に対しても、半独立国としてのつき合いをやって、定期的に大使を派遣して交流していたと言えるわけです。

朝鮮半島も全く同じで、豊臣秀吉の侵略によって日本との関係が大変悪くなりますけれども、それ以降、江戸時代になって、早速、朝鮮通信使が日本に来る。もちろん、朝鮮は中国を親の国と見ていましたから、その点で琉球と朝鮮半島は共通項を持っていると言えるかと思います。それは大きく言えば、中国の東北3省、内モンゴル、新疆ウイグル、チベットと同じです。周辺地域が形成されたというのは、一民族一国家という基本原則ができた近代社会の定規に合わせて、こういう残された問題が十分に議論されないまま今日に来て、国家権力だけの範囲、つまり法律的な領土と国土の区別がつかない形で議論されやすい。

しかし、実は中身は全く違う。例えば言葉としては、沖縄人が沖縄のことはウチナンチュウと言いますし、旧体制の日本、つまり薩摩以北の日本については、ヤマトンチュウと言って使い分けている言葉が、いまでもそのまま使われているわけです。

さらに余分なことを言えば、琉球の近代国家の範疇としての周辺地域的な位置づけは経済にも出ています。薩摩以北の経済の中心は農業であったということは、近世まで続いていたわけですがけれども、沖縄では農業が中心的な地域経済の核になっていたことはなくて、中国本土、ルソン、台湾、日本列島にまで、通商によって経済を成り立たせていたのが琉球政府で、経済構造まで変わっていたと言えるかと思います。

その点でローマと中国との比較、あるいは、それを日本に当てはめていったときの課題というので、国土というのは定義的には、曖昧なものを周辺に持った形での国土概念という形になるのではないかと思っております。

次に、近代国家が成立して国家間の抗争が起きる。一民族一国家という民族国家論の一つの弊害として、国家間の戦争が起きて、その究極的な姿は第一次

世界大戦、第二次世界大戦となるわけですが、この苦難を味わったのがドイツの事例でございます。Lebens Raumというのも、非常に強く意識されて、世界的にLebens Raumという言葉がその分野のところで定着していったのも、ドイツの問題があったからです。ドイツ語での定義が世界的に共通されたわけですが、それがハンザ同盟です。ドイツ騎士団が、ドイツの本土から植民的にバルト海の中欧港湾都市に定着していきます。その範囲がこの図面、「ハンザ同盟とその商業圏」です。十字軍をバックにしたドイツ騎士団の領地が、いまのラトビアからポーランドまで点々とドイツの植民地が出てくるということになります。

それが引き継がれまして、ヒトラーが、ここはもともとドイッチュランドであるという主張をするわけです。したがって、Lebens Raumというのはヒトラーの政治思想として取り上げられてきて、ヒトラーの統一ドイツの中に組み入れられていく形になりまして、それが第一次世界大戦を招くわけです。ドイツが敗けて初めて、バルチック海沿岸地域の、歴史的に言えばドイツ騎士団の歴史を何百年も根づかせていたところが全部、ドイツから剥奪されてスラブの勢力圏内になっていく、こういうことを経験しています。したがって、民族と国家の間には非常にギャップが存在しているということが言えるので、「国土とは何か」と真面目に書けと言われると、なかなか書きづらい。

バルチック海のドイツのケースでも、ドイツ騎士団はご承知のようにキリスト教のルーテル派の集団です。ところが、間に挟まっているポーランドはカトリックですから、宗教戦争的なものを持った形で出てくる。そして、ドイツ騎士団の東側はロシアのキリスト教という形になりますから、近代国家の成立の国土というものは、ある意味では曖昧といいましょうか、ある意味では非常に複雑に交錯しているという形で21世紀まで引き継いでいる、こういうふうになっていいと思います。

こうした内訳が「国土空間概念の不完全性」というところですが、さらに不完全性をもたらしている1つの要因は、民族自体に盛衰があるということです。これも議論のタネで、議論としては面白いと思いますが、いま、少子化の問題

が日本列島で起きているわけですが、ローマの歴史を読んでいますと、ローマも建国以来、最後に消えるまでの間に少子化問題が社会的に最大の問題になった時代があります。

それはどういうときかという、真ん中に書いておきましたけれども、「バクスマーナ」といって、ローマは建国以来、強いローマを目指して着々と歴史を歩んできますが、それが最盛期になった時点でその問題に直面しています。日本がいま少子化、人口減少という問題になっているのは、歴史的には別に初めてではないのです。そういうことがありますので、国家という民族の社会のベースになる民族の動向を、どういうふうに考えるかということが大きな課題になっていると思います。

話が十分整理されないで申し訳ないのですが、Benelux 3国というのを考えてみますと、Benelux 3国は非常に小さな国で小さな民族ですが、今日の新聞を見ましても、1人当たりのGDPは非常に高い水準を誇っています。しかし、基盤産業は、平野の真ん中ですが、強いドイツとフランスの間に挟まれて（イギリスからの圧力もありますが）、通商を経済としていたという点では明治までの琉球と同じ宿命を歩んでいるということが言えます。

同じ目で見ましたときに、日本の場合、最近、韓国に海運港湾の貨物取扱いがみんな持っていわれているわけですが、朝鮮半島も、遠いがゆえに固定的な民族社会をつくり上げてこられた日本列島と大きな中国との間に挟まれて、かなり昔から、通商的な性格を持った民族社会をつくってきたのではないかと考えられます。中国では倭寇という言葉がありますが、この間読んでいた歴史の論文を見ますと、人数からいくと日本は少数派だったということが歴史の中でかなり議論されているようでございます。倭寇の中心は半島人、あとは中国の沿岸地域の住民だった、こういうふうに言われています。

その結果、Beneluxは今日もなお通商型の国土づくりというのを基本にやっているのではないかと、こんなふうに思われます。この辺は哲学と絡むところでございます、どういうふうに考えていったらいいのか、議論のタネとしては根本問題につながる課題であると言えようかと思えます。

では、周辺地域を、日本の2000年の歴史の中ではどのようにしてきたかということ、日本史で振り返ってみますと、はっきりしないのですけれども、日本でも属州領土の概念があったのではないかと、こんなふうに思っております。属州的な扱い方をされているのは、奈良、京都に国家権力が定着しましたから、その周辺になるので、ここでは琉球と奥州と書いておきました。あとは南九州の一部を含めまして、こういうところがそういう範囲だったのではないかと。

大和朝廷から平安朝までの中央政権の範囲は、歴史的な過程からいきますと、念珠の関、白河の関、勿来の関を結ぶライン、つまり現在の新潟県、栃木県、茨城県、この県境に1つのラインがあって、そこまでしか及ばなかったときがあって、そこに基本的な関があった。つまり、平安朝時代の前期までは関の外は外国だったということが言えるわけで、それがさらに北進しまして、多賀城に本拠地をつくることになりました。さらにそれが北に延びて胆沢の関を北限にする形で、それ以北は中央政府の支配ができなかった。平安の中期くらいになってきますと、金沢の柵、弘田の柵、厨川の関、いまの地図で言いますと、盛岡と秋田を結ぶ線まで中央政府の国土が広がっていったということだと思います。

こうしたことに対して、周辺地域なるがゆえに奥州藤原氏が育ったのではないかと。これの前には安倍氏や清原氏がいますけれども、そういう固定的な国家で、周辺に力のついたところが半独立国みたいな形ででき上がって国家を形成する。あるいは、二セ国家かもしれませんが、その辺の概念はもっと勉強しなくてはいけないのかもしれませんが、チベットとか、いまの新疆ウイグルと同じような形ですから、現在の中国の基準で言うと自治区的な形のもが出てくる。

薩摩なんかも同じことがあって、サントリーの佐治会頭の言葉にありましたけれども、熊本、鹿児島、熊襲と蝦夷というようなことで、東北と一体になって、そういう目で見られて言われていたというのも、国土の概念が、時代によって、中央政権の強さによって変わってくるわけです。

したがって中国の次の歴史 - - 歴史の上で一番大きくまとまったときの中華人民共和国がいつ解体するかという問題、これと似たようなことは、ミニ的な

視点から見ると日本列島にもあった、こういうふうには言えると思います。

統治圏域外の周辺地域を国土としてどうとらまえていくのかということで、現実的にはこの問題は、北方領土の位置づけでもそうした議論をきっちりしていかないといけないし、していないところが、国民的に北方領土を背後から押す力が全くないという状況を招いているのではないかとすることは、こういう歴史的なあれからも言えるような気もしております。

そこで問題なのは、我々としては中国というのが近くにあって、中華思想です。中華思想の中での国土とは何かというと、東夷・西戎・北狄・南蛮、こういうことが中華思想の基本になって出てまいります。中国の国土思想からしますと、実は、皇帝が治める地域が中国なのだ、あるいは中華なのだ、こういうことになりまして、その周辺の東夷・西戎・北狄・南蛮にいるのは、現代的用語で言えば属国であると。

属国の扱いはどうするのかというと、半分独立している国というふうに認めていますから、ここには直接中国が征服に行くことはない。ただし、ちゃんと貢ぎ物を持って挨拶に来い。そして権力内に入る。半独立的に認めている証拠に、時の皇帝は、周辺地域の統治システムは王が治めることを認めると言っているわけです。それに対して、わかりましたといって日本国王と名乗った典型例は足利義満であり、豊臣秀吉がそれに対して怒ったとか、あるいは聖徳太子が怒ったというような話もこれと絡むわけです。したがって中国は、皇帝統治の本土と王統治の属国、さらにその外に中国の権限が及ばないところがあるという、同心円的にいくと三層構造で考えている、こう言っているのではないかと思います。

実はそんな問題に気がつきまして、先々月あたり、井上靖の『風濤』を読み直しました。『風濤』という小説は日本では珍しくて、当時、あまり評判になっていませんが、非常に名著だと思います。当時の高麗、朝鮮の立場から元の日本来襲を説いているわけです。それを読みますと、高麗の思想は、日本との間に挟まれている。もともと朝鮮自体は、中国の中華思想の中で、王、つまり朝鮮王が支配する地域というのを彼らは割り切っている。隣と接していますが

ら、それは割り切らなければつづされるわけです。それで日本との間に挟まれるという形になって、フビライ政権と日本との間に立って、独立の危機を約半世紀過ごすということが出ています。その結果、娘を中国に嫁がせるわけです。中国には逆らいません、いろいろ経済的な負担はさせないでください、ということをする。まあ、井上靖の小説ですから、小説という一面もあるけれども、ご承知のように井上靖は歴史のデータをきっちりと踏まえて……。

A氏 東西南北のこれでいくと、下の「夷」とか「戎」というのは、何か意味があるんですか。

今野 蔑視です。差別用語ですよ、この4つは。

A氏 その中でも南が一番低いですかね。そんなことはないですか。

今野 東夷はエビスですから。日本はこの思想をそのまま歴代、受け入れていたんですね。北海道のことを蝦夷という形で、平安時代からずっとそれは定着していますね。

C氏 結局、みんな東だと思っているんですね。北海道は北じゃないですか。でも、征夷大將軍とついていると、東を成敗しているというか、都から言うともみんな東で、その頃の発想は蝦夷も東なんですね。

今野 本州がこう曲がっているのは当時はわからなかった。

A氏 南蛮というのが一番低いみたいに思うけれども、東夷というのも安心しちゃいけないんですね。

今野 ダメです。それから、「夷狄」を使っている古文書もありますね。

中華思想に戻りますが、実はそこまでわかっただらば、これは個人的な話ですが、金正日（北朝鮮）の日本に対する姿勢というのは、ちょうど元寇のときの半島と同じなのです。俺も中国の属国だ、日本はその外側でもっと悪いんだ、俺より弟分だ、こういう見方ですよ。だから、拉致なんていうのは社会的問題なのかどうか、それはわからない。そんなのは当たり前だ、それを返せとは何ごとだ、こう言っているのだと思います。歴史的には筋の通った政治主張だなと、こういうふうにも思ったりしています。

しかし、あれだけ何千年の歴史を踏まえてきていますから、この中華思想はなかなか抜けないだろうと思います。そうすると今後の課題としては、日本は第二次世界大戦で敗けてアメリカについたわけです。太平洋を越えたはるか遠いアメリカとくっつくのが国土の安全の基本であったわけですが、すぐ近くに中華圏の核になっている中国大陸がそばに来て、それが中華思想で凝り固まって、「俺は皇帝でおまえは王だ」と言っているのとどうつき合うか。外交的な基本姿勢をどうするのか、これは国民的な議論だと思います。そうかといって、あまり表立ってやっても馬鹿に見えてしまうでしょうけれども、こんなことが非常に気になるかと思うわけです。

**B氏** 中華思想が成立するまで、中国の中の民族国家的な思想はどうなったのですか。

**今野** 当初の原点は漢です。

**B氏** だから、漢民族だけの話なんでしょう。

**今野** 国土空間のところに「民族の衰退」というところがありますね。人口動態で読み取れるところがある、経済発展でも読み取れるところがある、居住区域がどこへどういうふうに拡大していったか。同時にこれは、ダイナミックな民族の動きでは、民族同化というのがどこで起きているかということですよ。

ね。

**B氏** チベットの問題にしる雲南省の問題にしる、まさに漢民族の拡大ということだけの話ですね。

**今野** この4つの中に入らないで、同化させようとしたのが侵略戦争だったという定義がいまの定義ではないかという気がしますね。だから、北京の史跡を巡りますと、清が建国のときには、すべて漢字より先に満州語で書いてあるわけです。それが200年の間に消えてしまうわけです。天壇にしても何にしても、天安門の額だって満州語ですからね。

**A氏** 例えば、中国は帝国という意識はあるかもしれないけれども、国家という意識は本当にあったのかどうか。私たちの場合は、国家という意識で初めにすぐ思い出すのはフリードリッヒ・リストで、特に大英帝国がものすごく張り出してきますから、それに対抗してドイツ国家主義を唱えて、ドイツ国民としてもっと対抗していこうとした。私たちの意識では、その辺でリストがやったあたりが国家が一番強くなった。それ以前に、国家という意識は歴史的にあまりなかったんじゃないでしょうか。

**今野** なかったですね。その幾つかの証拠は、別に統一的に歴史を研究しているわけではないけれども、日の丸を国旗に設定したのが明治8年でしょう。ところが、それは教科書を見るとあまり出ていなくて、元寇のあと海外に出ていくときに日本船は日の丸を掲げればいいという話が出て、次第にそうになっていった、それが日の丸の起源だと言っていますが、法制的に位置付けたのは明治になってからです。

それから、帝国陸軍の特に関東軍の論理は、中国には国家がない、したがって日本が出て行ってなぜ悪いのか、こういう論理です。この思想が田母神論文まで来ているのだと思います。米内光政、山本五十六の海軍の和平派の論理も、

断片的な資料しかないけれども、阿川弘之の山本五十六伝を読むと、国家のない中国と国家のきっちりしているアメリカとどっちにつくのかというと、答えは明瞭ではないかという思想だ、というふうに書いています。和平派の米内光政、山本五十六、井上成美、あの3大将の考え方も、そういう意味では陸軍が中国大陸を見ていたのと同じ見方を、中国大陸に対してはしているのかなという感じを持ちましたね。

この議論は、次の3番目の「国家の盛衰とフロンティアの役割」というところで、フロンティア論とつながるわけです。どうつなげるのかというのは、正直言って私個人も思い悩んでいるところがありますが、実は非常に単純な話で、日本の歴史を振り返りまして（中国大陸も同じですが）、成長して統一政府が大きくなったときと、縮小してきて地方分権型になってくるときと、歴史はどうも息をしているように思います。民族社会というものが、一つの空間を題材にした動物学的な人間集団の一つの有機体だと仮定すれば、それが息をしていること自体が基本的な摂理として認めていいのかどうか。認められるのではないかという意味も含めまして、議論があるだろうと思います。

その摂理があることを前提にすると、与えられた空間の中で豊かさが非常に高まっていったときに出生率が下がるというのは、神の摂理としては、一つの動物の種を異常に大きくして混乱させることを避ける有力な歴史的営力である、ということまで言えるのではないかという感じがします。

**A氏** 豊かになると出生率が下がるという論理は、ある程度言えますかね。モンゴルは共産主義のときに合計特殊出生率が6.0以上だったんです。あれから自由主義になってきて、いまは2.0台なのです。急激に10年間で半分以下に下がった国というのは非常に珍しいらしいですね。

**今野** それの一つのデータは、中華人民共和国時代の情報閉鎖時代にまとめている北京政府の資料を見ますと、「解放後の中国の人口推移」というのが出ています。これでちょっと面白かったのは、この30年間（1953～1982年）で、

漢族の増加率より少数民族の増加率のほうが高いです。それで、下の欄の出生率を見ますと、これは国全体ですから少数民族も含めてですが、1949年は36.0と非常に高い。これがものすごく落ちてきて、85年には17.8。そして、死亡率も落ちてきている。これは生活水準が上がっているからです。日本列島と全く同じ動向ですね、何十年遅れか出てきているというだけで。さらに、都市と農村で見ますと、農村のほうが遅れていて都市のほうが進んでいるということが言えます。

人口の統計からいくと、男女の平均寿命は、解放前、つまり1945年には35歳だった。それが1982年には67.9歳です。結局、生活水準が上がって、それによって幼児死亡率、新生児死亡率が下がって出生率も下がる。そこはみんな一本の糸でつながっていると言っていいのではないかと思います。

そうすると、合計特殊出生率が2.0を割ったとか、少子化とかいうことは、個人個人が判断して子供を産んでいるという前提が崩れてしまうのではないかと気がしています。それをサポートするもう一つの参考データは、ローマ帝国が少子化対策で悩んでいた政府であるということにも出ています。そして現在では、中国も含めて多民族国家では例外なく少数民族が出生率が高く、本体民族は、フランスにおいてもドイツにおいても出生率が下がっている。

**B氏** 中国の場合は、子供の一人っ子政策みたいな問題でも少数民族は除外されているんですね。それからもう一つ、経済が伸びるに従って、女性の社会進出というのは明らかに子供を減らしていると思います。アフリカとか何とかの例のように、貧しければ貧しいほど子供は増えているでしょう。

**今野** 生まれた子供の成人まで達する率が低いところは、動物学的に言うところ卵をたくさん産むわけです、魚にしても植物にしても。その摂理があって、人間もそこから脱却していないのではないかと。神の掌にのった形の話なのではないかと思っています。少なくとも議論するタネにはなると思います。

**B氏** ローマの場合も、都市経済的なものが発達するに従って女性の出生率というのは減りますよね。

**今野** ええ。女性の出生率が減ると同時に、ローマ史を読んでいてちょっとギクッとしたのは、男性の独身率がうんと高くなる。結婚しないんだそうです。

**A氏** ローマの場合は、戦争に行っているからですか。属国に戦争に行っている間は結婚しないでいて、そこでおカネを貯めて戻って、結構年取ってから結婚しているというケースが多いですね。

**B氏** アメリカの場合でも、英国の場合でも、いま、異民族が国の中にたくさん入ってきているから人口が増えているけれども、白人の出生率は減っていますよね。

**A氏** そうです。アメリカは全体で見ると意外と出生率は高いけれども、人種別では全然違いますね。

**今野** フランスだってそうですよ。白人のフランス人は合計特殊出生率は2.0にだってませんからね。ところが、入植してきたコロニーの連中は非常に高い。

**B氏** ローマも、過去においては似たようなパターンがあったんじゃないですかね。ただ、さっきからお話を伺っていて、中国は果たしてどこで「国」というのを意識してきたのか、日本だって幾つかの国に古代は分かれてますでしょう。

**A氏** そういう点でいくと、日本が世界の中で一番、国としての意識を持

ち続けているのかもしれませんがね。

**今野** だから、固定的という言葉を使ったわけです。ただ、北海道のことを見ますと、近代日本がこれだけ発展したフロンティアは北海道を着実にとったからで、これは否定できない事実だと思います。次の日本人の社会が大発展するときは、どこをフロンティアとすればいいのかという議論があって、沿岸域というのを出すか、出さないかというときに、僕の人生の中ではその議論が一番盛んにやりました。海を位置づけて納得させられるのではないかと。

**B氏** いまおっしゃったのは、いわば東夷の時代から日本海文明というのがいろいろつながっていて、そのあとフロンティアを求めたのは太平洋側文明のほうに移ったからでしょう。そこで北海道がというのはなぜかなと思いますね。北海道がフロンティアだったからというのは、そう言えるのかなあと思いますね。

**今野** もっと細かく言えば、織田信長が天下を統一して徳川家康の徳川政権ができるまでの間、それから三代将軍時代あたりまでが日本の成長期ですけども、このときのフロンティアは北海道には全然出ていないで、いわゆる東国なんです。東国は歴史的に2段階を経てきているわけです。

1つは、もっと古くは武士政権ができたときの成長です。武士政権ができたときは東国はあまり力になっていなかった。そして織田信長が天下統一して、徳川政権が安定して全国三千万石の体制が整うまでには、残った関東と東北、太平洋岸の開発が非常に進んでいる。それが支えたということが言われていて、これは小説にもなっています。

伊達政宗はもともと出身地が福島盆地ですから、福島盆地をベースにして会津を押さえて、山形の県南部を押さえていたのが、豊臣秀吉に召しあげられるわけです。召しあげられて、それを全部とられていまの宮城県にやられたときに、反乱を起こそうとするわけですね。反乱を起こそうとしたときに相談相手

に徳川家康のところに行ったらば、そう腹を立てるな、俺も三河をとられて、遠州をとられて、ろくにコメもとれない江戸によこされた、だけど、開発の余地が一番大きいのは関東平野と仙台平野だぞと言って、それ以来、政宗は徳川方にくつつくわけです。関ヶ原のときは完全に徳川の信頼を得て、最後は、三代将軍の子守までやらされて、副将軍と言われた時代まであるわけです。

そういう事実を裏返すと、徳川政権ができる、できないあたりから、一番遅いのは八代将軍の吉宗の時代まであったといいますが、新田開発が非常に進むことの便益を一番受けたのはいわゆる関東、東北なんですね。

**C氏** 東北はよくわかるんですね。かつフロンティアの話で、明治時代も東北と書いてありましたが、戦後、フロンティアとしての北海道の評価というのはそんな高くできるものなんでしょうか。つまり明治時代以降は、例えば東北の人的資源も含めて相当成長に寄与したと思うんですね。北海道はどちらかという資源的に多くもないし、もともと人が住んでいるわけではないので、労働の供給源にはあまりなっていなかったような気がします。そういう意味で、戦後の北海道というのは本当にフロンティアだったのかなとちょっと思うのですが。

**今野** 北海道がフロンティアとして機能したのは、最初、経済的な効果として出るまでちょっと時間がかかって、全人口の10%の武士階層が失業したことでの吸収ですよ。

**B氏** 開拓使の歴史があるからね。

**今野** 明治の初年から統治者としては、北海道はそうした意味でフロンティアとして使ったと思います。会津の歴史を読むと、明治政府の意図がはっきり読めます。もしあれがなかったらば、西南戦争だけでは済まなかったろうと言ってますね。

A氏 北海道へ行ったのは失業武士が多かったんですか。

今野 みんなそうです。

B氏 追い出されたんです。開拓使という名目で入れていたわけです。

今野 東北の中で、わずかに北海道的な失業救済的なところから始まったのが青森県の下北南部です。これは会津の歴史を見るとはっきりしています。会津が戊辰の役で反対したためにあそこに回されて、イモも採れないところで。

B氏 斗南からの歴史がある。

今野 経済的に本格化したのは、戦後だという見方は成り立つと思います。というのは、戦前まで北海道はコメが自給できなかったから、みんな東北からコメを持ってきていたわけです。だから水産物を別とすれば、経済的な効果はまだそんなに出ていなかったと思います。収支計算はマクロ経済でやらなくちゃいかんのでしょうか。

C氏 そういう陸地の部分から考えると、その次の沿岸域となると、かなり飛躍というか、思考の転換をしなければいけないと思いますが、確かに外に求められないとなればそういうものかもしれないですけども、どんな可能性があるのかなといつも思うんですね。

今野 それは誰もわからないから、それでごまかしたんです。ごまかし政策だったかもしれません。

C氏 いまでもEEZ（排他的経済水域）まで考えれば、日本は確かに広大なものはありますね、世界の中でも10番目に入るぐらいの。それでどうい

展開が見込めるのかというのは五里霧中ですよ。膨大なエネルギー資源があるのではないかと、いろいろなことは言えますけれども。

**今野** ただ、あえて論理的に抵抗するとすれば、回遊魚のマグロが外洋で養殖するのが目の前に来ているでしょう。あれが本格的になれば、海がもたらす食料というのは飛躍的に伸びると思うんです。

**C氏** そういう領域をたくさん持っているという意味で。

**今野** ええ。マグロは高級魚だけれども、いまの海苔やアサリと同じ役割を果たしてくるようになったら、食料問題は一遍に片づくかもしれないと思いますが、確かにいまの国民の目から見るとわからない。

**C氏** かつ、我々も期待しているわけですね、海洋という問題を。そのわりには、具体的な目に見えるものを提示できない部分がすごくありますよね。

**A氏** このハンザ同盟の地図を見ているとすごく面白いですね。日本というのは非常に特殊で、外からの圧力がなくても「国家」という意識が昔から強かったと思いますけれども、バルト三国というのはものすごく国家意識が強いんですね。この辺は、ドイツ騎士団が来たり、その後、ソ連が圧力をかけてきたりするという中で非常に強くなっているんですかね。

**今野** バルト三国の場合、ヒトラーがなぜLebens Raumを基礎にしてナチズムをもって臨んだかということの説明を一つの論文にまとめようとする、もう一つの大きな要因として、スウェーデンの大国時代があります。そのときにバルト海を横断してここに入り込むわけです。それがドイツの植民をある意味では寸断するわけですね。そういう混乱期もあります。

第一次世界大戦前までのドイツの領域というのは、東へ行けば行くほど小さ

くなるのですが、ダンツィヒに代表されるように都市を中心とした植民なんですね。それを面的に絵を描いた張本人の一人が、ヒトラーだということは言えるかもしれませんが。この下の図面にありますように、ドイツ帝国、いわゆるヒトラードイツは、バルト海の沿岸沿いに細長く延びるんですよ。その影響はいまのサンクトペテルブルクにまで及んで、ドイツがバルト沿岸を押さえてきたことによってスラブが西ヨーロッパに傾倒するわけです。だから、サンクトペテルブルクを西ヨーロッパ文明の窓口にした根拠は、そういうことを背景に持っているわけです。

A氏 ニバ川と書いてある、この辺がサンクトペテルブルクですかね。

今野 そうです。

A氏 ロシアの唯一の海への窓口ですね。

B氏 ただ、ここはドイツ文明ではなくてフランス文明ですからね。

今野 そうです。逆に言えば、ドイツがあるためにロシアというのはフランスと手を組むわけです、ドイツの脅威のために。

B氏 ヒトラー以前に既にそういう歴史があるわけですね。

今野 そうです。基礎は騎士団ですよ。十字軍。

B氏 北欧三国だってハンザ同盟との関連は随分いろいろな議論がありますけれども、確かにドイツ系の人間は、この辺の北欧、東欧の諸国でも、皆いまでも残っていますからね。ポーランドから何から。

**今野** ロシアに行ったときに聞いたのは、僕が行ったのはソビエト時代ですが、ドイツ語が一番通用するのはレニングラードだと言ってましたね。モスクワは全然ダメ。つまりハンザ同盟以来の歴史があって、バルト海交流圏だと。

**A氏** さっきの話に戻ると、中国というのは本当に国家という意識があったのか。要するに中国は、前の皇帝を倒した者が次の皇帝だということでしょうかね。ある時期からは首都陣取りゲームだということでしょう。そうすると国家ではなくて、言ってみれば陣取り合戦で。

**B氏** いまの中国そのものが、まだ建国50年。蒋介石のときから変わって、共産軍が政府を確立したときに建国しているからね。だから、国はそこから始まっているんです。だから考え方が、これだけ多民族を包括して国家を形成しているという、いわば大ローマ帝国時代のような考え方とは少し違うと思いますね。

**A氏** 共産主義は、国家意識を強めないとなかなか難しいですから。

**B氏** 統治のシステムとしてね。

**今野** でも、本当の意味の近代国家意識がどこまで普及して定着しているかということ、そこはいまだにかなり怪しいところがあるわけです。そういう内面的な脆弱点を持っている。それは中国の人民解放軍の組織そのものがそうでしょう。あれは第 軍団と言っているけれども、実はそうではなくて、河南省軍団であったり河北省軍団であったりしているわけです。それがそのまま出たのが、天安門事件なわけです。

**B氏** 天安門というのはそうですね。どこから軍を持っていくかで決まってしまう。

今野 そうそう。軍団の反応が全然違うんです。

B氏 いま問題になっているのは、例えば満州もそうだけでも、東北部分とその辺境部分の経済成長の度合いがそれぞれ違い過ぎるものだから、それが不安定要素をつくるだろうという話があることはあるんですね。そうすると、国というのは何かというと、外から見て国というのを限定するのではなくて...。そういう点で日本は本当に恵まれている。確かに北海道の開発は遅かったし、北海道は日本じゃないなんて言って怒られる大臣もいるけれども、ただ、国家的に言えば一つの国で治まっているからね。

今野 同化政策というのは、私の知識では、満州族との間は同化政策で、どれが満で、どれが漢か、いまや区別が全くつかなくなって満州語がなくなっている状況なので、いわゆる結婚体制というか、男女関係から同化していったということは言えると思いますが、中国人の世界というのはある意味で純血主義なんですね。

私はラテンアメリカで勤務したことがあります。メキシコ以南のアルゼンチンまでの間に居住している中国人の、日本で言えば県人会名簿みたいなものがちゃんとあるんです。それで、ほかの民族とは結婚しないわけです。

C氏 朝鮮半島でも、同じ地域の同じ姓の人とは結婚しないとかあるようですが、それと同じような発想なんですか。

今野 そうだと思います。たまたまコスタリカにいたときに、通いつけていた中華料理屋の親父が、今度、跡取りが嫁さんをもらうんだと。「どこからもらうの?」と言ったら、「この名簿の中から探して、アルゼンチンから来てくれた」というんです。ものすごいですよ。スパニッシュ系の連中とは社会が全く別なんです。実はそれがチャイナタウンをつくっていった基礎だということ、後でアメリカへ来て聞きましたけどね。

**B氏** 内蒙古に烏海（ウーハイ）というところがあるんですよ。そこに内蒙古高等何とかという学校をつくる計画があって、学校をつくるということでコンピュータ教室とパソコンを寄付しました。金額的には700万ぐらいですが、それで学校をつくって、民族的な行事に我々も参加して、踊りや何かを見せられたり、晩飯を食ったり、いろいろしたけれども、民族的な自治意識は非常に強かったですね。ウーハイの市長というのは若いんだけど、いま、中央何とか委員会のメンバーに入ってきています。統治のために、そういう連中をかなり重用しているんじゃないかと思いますね。

**今野** この図面（「中国の民族」）で見てもらうとわかりませんが、満州族というのはもう区別がつかなくなって、凡例を見ればわかるけれども、点でしか押さえられていないんです。私が中国に何十回か行ったことからの感じでは、回族と漢族の違いも、いまや食事と教会の違いだけです。

**C氏** 宗教も回教ですか。

**今野** そうです。例えば中国のまちへ行くと、回食堂という看板が出ています。これは豚肉を出さない食堂なんです。

**A氏** これはどの辺ですか。

**今野** 西安に行けばいっぱいありますよ。先ほど言った、年間降水量500ミリ以下のところですよ。回食堂というのは北京にもありますよ。羊の肉を食べたいときはそこへ行けばいいわけです。

**B氏** 西安なんかは、昔から三国志の歴史の古いところだから。

**今野** 西安のまちというのは、漢族が麦の農業を展開していったときのフ

ロンティアです。西の限界線の拠点です。

**B氏** いまは逆にこっちから水を持ってこようとしているんだからね、農業用水も含めて。

**今野** 西安を越えると、黄河の谷沿いしか雨が500ミリを超えないんです。麦の栽培が細長くシルクロードに続いているということになります。

また脱線して時間ばかり費やしてしまうけど、中国と朝鮮半島の県境のところに朝鮮族がいるでしょう、吉林省とか。これは実は日本の植民地政策がすごく関与しているわけです。満州に日本人を開拓で入れたけれども、コメがまずくて食えない。ところが、戦前、内地におけるコメの質の点からいくと朝鮮米というのはかなり上なんです。うまい日本米、つまり短米が食えた。それで朝鮮半島からここに強制的に送り込んだわけです。

**A氏** そうすると、人種的にも朝鮮系統なんですか。

**今野** そうです。日本米の生産地を拡大していったわけです。そうしたら、戦後、スターリンがここから朝鮮人を引き抜いて、中国の西にバルハシ湖ってあるでしょう、ここに持ってくるんです。ここに、当時のソビエト連邦時代の、この範囲内の唯一の朝鮮人自治区があります。

**B氏** どこですか。

**今野** ええ。いまのロシア領です。その連れて行き方が、捕虜にした日本人を貨物列車に乗せてシベリア鉄道で西に連れて行ったのと全く同じやり方です。それで補償問題が起きているんですね。

**A氏** それは何か小説にでもなりそうですね。

今野 ええ。というのは、日本の捕虜を帰さなくてはならなくなったでしょう。それで労働力不足になって、その補充にここの朝鮮人を連れて行くわけです。

A氏 確かに国土計画をつくるときに、この地図で日本の国土計画をつくるという感覚だとだいぶ違うものができますね、ここだけでやるよりは。

今野 それでは、前に進ませてもらいます。

フロンティアというのを真面目になって考えなくてはいけないのですが、国土計画の中でどう扱うか。「国家の盛衰とフロンティアの役割」の下から2～3行目、「フロンティアから考える」といったときに、いわゆる京都、東京から考える周辺地域ではなく、周辺地域から周辺地域を見るという見方をすると、さっきの沖縄ではないですが、我々が気づかないいろいろな問題意識がたくさんある。

そうした意味で歴史を考えると、白村江の敗戦で古代日本は朝鮮半島から手を引きますけれども、それ以前は、日本は百済を属国扱いしていました。朝鮮半島南部というのはそうした意味では、自然発生的には日本人の“Semi Lebens Raum”だったということは言えると思います。それが倭寇につながり、いまの日本と親しい南北朝鮮の南につながっている、こういうことも言えると思います。それから、さっき議論が出ました、関東・東北という東国をどう考えるかという議論もあるし、ルソンなんかでもそういう議論がある。それから北海道、これも議論が出ましたね。

もう一方で、日本の民族は呼吸があって、膨張時代と縮小時代を300年くらいの周期で繰り返しているという論はある程度言える。この議論をふっかけたときに、一番これに感動してのってくれたのが京都大学の亡くなった長尾義三先生なんですよ。その後、長尾さんが瀬戸内や何かでいろいろ調べたときに、調べた証拠資料から見ると、日本民族は海人族と農耕民族とある。それがごっちゃになって日本をつくったという、米山一派の学説がありますね。

それと結びつけると、長尾さんが言うには、膨張時代というのは海人族が日本の社会の中で力を持っていて、縮小時代になると農耕民族型になってくると、海人族、農耕民族と結びつけて反論してきましたね。これはちょっと余分なことですが、それで長尾さんが中心になって、いまの沿岸域学会をつくったわけです。

C氏 そこにつながるんですか。

今野 そうです。それで、おまえ事務局長やれと（笑）。だけど、沿岸域というのもそうだし、海人族も曖昧でしょう。だから、カネや組織を背景にした協会なんてとてもつくれませんよということで、長尾さんと相談して、学会だけでも、学者が集まったの単純な学会ではないと。それで、最初は「沿岸域会議」としたんです。で、10年以上、会議を続けていた。そういういきさつがあるわけです。

C氏 日本の中の海と山の区別というのはかなり峻別されていたと思えますけれども、人も違っていたんですかね。例えば、海幸彦・山幸彦の話があるじゃないですか。ああいうのはそもそも人種が違う人同士の話としてあるのかなとか、これはまた全然話が変わりますけれども、それこそ地政学の本を読んでいると、ランドパワーとシーパワーという区別をするんですよね。シーパワーに対してランドパワーがどうなっているかとか。海と山とか、陸と海という違いかもしれませんが、そういう区別があるのかなと漠然と思っているんですけどね。

今野 どこで線を引けるかとか、正確な定量的な解析はできないけれども、日本民族の形成というのは、モンゴル・朝鮮間のルートと、あとは南方系というのが定説みたいになっていますね。その血の濃さだけの話なんだろうけど、モンゴル・朝鮮系が出雲文化をつくって、南方系が大和朝廷をつくっていった。

そこで出雲と大和朝廷の古代における壮烈な勢力争いがある、大和朝廷が勝つわけです。だけど、敗けた出雲に対して同化策として出雲大社をつくるわけでしょう。スサノオノミコトの話とか、ヤマタノオロチの話で同化していくわけです。それで一つになっていく。それで統一国家ができるということからすると、生物学的というか、動物学的というか、その血が両方入っている。それを海人族と山族と。もう一つがツングース・アイヌ系なんだけど、これは少数だったから。

**C氏** 古代の五畿七道の道の名前のつけ方も、結局、山の道と海の道なんですね。東山道と東海道。西のほうの山だけ2つに山陰と山陽で分けたけれども、本当は西山道なんです。で、南海道、西海道。だから山と海なんです。そういう分け方をするんですね。区別の仕方というのはいろいろなところにつながるような感じがしますね。

**今野** 議論としては文化史というのは面白いんだけどね。

**B氏** 神話の時代より前に、朝鮮なり中国なり方々との交流があったんじゃないですか。

**今野** 人類学の領域なんだね。だから、人類学の領域でこんなことを研究している人がいますよ。まあ、沖縄人、フィリピン人からとったアイデアだと思うけれども、南方系は足首が非常に細いんです。足首の太さと身長・体重との相関が、細い人は南方系の血が濃い人で、それに対して、垂れ尻の大根足は北方系なんですよ。

**B氏** だけど、文化史的に見ても草創期から、日本の文化、あるいは国土計画なんか特にそうだけど、全部、中国の文化から入ってきたものでしょう。だから、何が言えるのかなあと思う。それに、青森から何なのって向こうのほ

うでも古い文化財がどんどん発掘されてきている。豊臣だの何だのって我々が知っている戦国時代とか、そういう時代以前にみんな人間が行動していたという話であって、国を考えるときの土壌が少し違うと思うね。

**C氏** いま、そういう意味でちょっと流行りなのは、東のほうにももっと大きな文明が古代はあったのではないかという話がよくあるじゃないですか。埼玉古墳群とか見に行ったんですけど、あの時代、東の国というのはどういう状態だったのかと考えると、いまの歴史は大和中心で書かれているから、わかっていない。文字とかそういうのがなかったから伝播していないのかもしれないんですけど、本当は東にも大きな文明があったのではないかと思うんです。

さっきからの話で思うのは、古墳で前方後円墳というのがありますね。あれは5世紀から7世紀の間につくられて、突然できて、300年でパッとやめられるんですけど、あれが日本の中で観察されないのは、北海道と沖縄、当然といえば当然ですが、あとは秋田で、それ以外はみんな前方後円墳があります。そうすると、あの時代に前方後円墳があるところは、一つの交流というか、文化が同一のものがあったのだろうと考えると、一つのお墓かもしれないけれども、ああいう中ですごい連帯感みたいなものは何らかの形であったのではないかなという気がしますね。

**今野** そうです。それは、歴史時代というのは文字が起きて歴史が残っているところで、前歴史時代から交流は証明されていて……。

**C氏** かつ、これは日本というかたまりも証明していると思います。つまり、前方後円墳というのは朝鮮半島にはないんです。方墳はあるけれども、円とあれの組み合わせというのはいない。

**B氏** 中国にはあるんじゃない？

C氏 いや、ああいう組み合わせのものはないと思います。円墳とか方墳は別々にはありますけれども、一緒になった形のものというのは日本独特なんです。そういう意味では5世紀から7世紀の間の前方後円墳というのは、日本という一つのアイデンティティを形づくるものとしてあったのではないかと思います。恐らくあの当時、それほどの旅人がいたかどうかわかりませんが、前方後円墳を見ると、この地域はどのくらいの格があって、同じ文化を共有しているとか、そう思わせるシンボルだったのではないかなという気がします。大きさによって、都市の格じゃないですけど、このまちの大きさとか、そういうのがわかるような形で大から小までそろっている。

今野 ただ、前方後円墳は、文化と言いながら権力構造ができてからの話だから、交流そのものの証明としては、戦後の歴史学というか、考古学で非常にショックな事件があったのは黒曜石問題です。黒曜石の産地が全国から出てくる。ところが、黒曜石の産地は、諏訪に小さなものと、大きいのは北海道の十勝なんです。だから、どのくらいのカネがかかったかわからないけれども、黒曜石は細工しやすいものだから、全国にあつという間に出て、黒曜石成り金というのが古代からあったわけです。それは縄文時代ですね。

あと、平泉の藤原の経済は何かというと、決してコメの経済じゃないんです。馬と金の経済です。金を掘り当てて、“金売吉次”じゃないけど、当時、唯一の市場の京都に売り込んで行って、それで財をなしたわけです。だから、平泉の藤原は流通経済的な経済構造を持っていた。その典型的な言い伝えが金売吉次だと言われています。

実は私の郷里は、藤原三代が平泉で開く前の、つまりゼロ代というか、マイナス1代までは、私の郷里の宮城県亘理というところが藤原氏の根城だったんです。なぜ平泉に行ったかというのは郷土史の研究の最大のテーマになっています。私もその会員の一人ですけども、やっぱり金なんですね。要は金が売れるのは京都なんです。金というのは武器と結びつかないで、芸術品、宗教、仏像や工芸品と結びついたわけです。

C氏 そうの意味では鉄とかそういうものとは違うわけですか。

今野 そうです。出雲と大和の争いは鉄と青銅器です。

A氏 横手から大曲のあの辺にかけて非常に広い平野がありますね。東北の中で一番広いのではないかなと思うくらいですが、あそこはコメがとれたのですか。

今野 秋田米というのは昔から銘柄米ですよ。

B氏 あそこから秋田市のほうにかけて、まさに穀倉地帯で。

C氏 古墳絡みでは、最近、興味を持って勉強を始めたばかりですけども、鏡なんか面白いですね。中国から持ってきているものもあれば、日本の中でつくっているのと2種類あって、かつ、コピーを何回もとっているんです。柄模様を鋳型をつくってコピーをとっている。だから、傷がそのまま何枚にもなっているのがあって(笑)、それを見ると、当然、古墳に埋葬されるためにあるわけですが、ああいうのがどういうふうに伝播したかとか、かなりわかってきているという話で、古代は結構面白いなあと思っているんですけどね。

A氏 きっかけになったのは三内丸山ですかね。

今野 まあ、三内丸山が裏付けの証明をしたということでしょうかね。むしろ新発見としては、三内丸山は採集時代という歴史で括っていたわけです。コメの栽培が日本における栽培農業の原点だと言っていたのを、引っ繰り返したわけです。粟を栽培していたと。だから、縄文時代と弥生時代の差は、農業があるか、ないか、採取か、栽培かと言っていたのが、栽培の歴史が縄文時代からあったということの証明として、三内丸山が一挙に……。

A氏 栽培は粟だったんですか。

今野 コメじゃないんです、粟です。米が南方から来る前なんですね。

もう時間なので、「海洋空間と防衛空間」を話させていただきたいと思いません。

一つは、「日本経済の脆弱点と不安定さ」というので、いま、ソマリアで海賊問題が起きて議論が始まりますね。経済大国になったためにシーレーンが非常に長く伸びた。それに対して防衛機能は小さく縮こまってしまって、派遣ができない。その矛盾が、自衛隊の海外派遣問題等ですとあるのではないかと思いますけれども、それはともかくとして、現在のミサイル防衛戦がどういう形でできているかというのは、もと防衛庁でも飯を食べていたことがありますから、それでいきますと、もちろん仮想敵国は中国、北朝鮮、ロシアです。日本海の向こうです。

レーダー基地の配列というのはこういうふうになっています。ここに略図を書いておきましたが、利尻、礼文、奥尻島を経て、佐渡、能登半島の輪島、隠岐、ここに日本はレーダー基地を持っています。これは本州の海岸線、北海道の海岸線から数十キロないしは100キロ近くの外側、つまり仮想敵国に近いわけです。で、自衛隊が24時間監視しています。第二線はこちらの海岸。首都防衛の線というのはそういう意味で3重ぐらいにしてあるんです。

ところが、この防衛線が破られたのは、北朝鮮の拉致問題の工作船によります。これだけの防衛線を持っているのに破られて、富山湾に小舟をつけられて連れて行かれた。

A氏 ああいう小さいのは引っかけられないんじゃないですか。

今野 小さいのは引っかけられないけれども、戦略上の考え方として。

それで、ああいうゲリラ的なものは捕まらない。もちろん、これはミサイル主体に考えていますから、実戦部隊をここに配置すると対外摩擦が起きますの

で、防衛上の問題もあって実戦部隊は本州の中にあるわけです。それが小松基地であり、千歳基地であり、新田原基地であるという形にしてありますけれども、これの穴を埋めるためにイージス艦を買ったわけです。これの外側にイージス艦を配置する。したがって、いま2隻あるイージス艦は舞鶴に配置させていますね。

こういうようなことは海洋問題を考えるのに - - 戦前、対米戦争が起きたときにどうするかという議論で、時間がないから結論だけ言うと、米内光政、山本五十六、井上成美の海軍平和派の哲学は、日本は海洋国家である。したがって、大陸的なロシアとか中国と結びついても日本の防衛はできない。そうすると、一緒に仲良くしておかなければならないのはアメリカである、こういう哲学なんですね。陸軍は大陸に入り込んでいきましたから、そこは思想的な違いだったと思います。

ところが、ショックなことに、戦争が45年の12月に始まって、翌年の4月17日に東京初空襲があるわけです。太平洋岸は島がないから防衛拠点がなくてしょう。防衛拠点がいない隙を突いてアメリカの連合艦隊が北関東の沖合に接近して、東京空襲をやって中国大陸に逃げるという形にしたわけです。穴が突かれたわけです。それを山本五十六は、戦争前、天皇陛下に、「半年から1年は大丈夫です、あとはわかりません」ということを言って大騒動になるわけです。いまだにそれはどういう思想だったかということが話題になっていますけれども、それは、真珠湾の太平洋艦隊をつぶせば半年から1年は安全で過ごせる、その終わるときに終戦に持って行ってほしいと。こういう背景があったのではないかとされています。そういうことで、海か、陸かという地政学的な哲学論と結びついているわけです。

これはある意味では国土計画の最も基礎的なフレームなんですね。日本列島をどう国家として考えていくか。もちろん、日本のいまの国情からすると、自衛隊は外地に出られないことを基礎にしていますから、公の場で議論できる話ではないけれども、内部としてはそこをしっかりと見つめておく必要があるのではないかと。そこに海の問題というのが絡むのだと思います。

だから、沿岸域学会なんていって、将来これはカネになりそうですと言っているのは、ある種の妥協であり、ごまかしでもあったわけです。海というのはもっと重要なことがいっぱいあるわけで、日独伊三国同盟に対して米内光政や山本五十六が徹底的に抵抗して、そのおかげで左遷までされる。それは「ドイツと手を組んで何の得になるのか」という哲学的な論争で、まあ、国土計画論の国土空間的な話というのがあって、戦争で敗けたし、その辺は資料もなくなってしまったから、曖昧なままにされているけれども、日本の場合には、長尾先生が海人族かどうかと言ったことと絡むけれども、法学で言えば、英米派なのか、独仏派の大陸派なのかと。法律の解釈一つまで違うわけなので、どちらの哲学でどう行くのかという、日本の将来と結びつく国土計画の基礎だと思っ  
んですね。それだけ言っておきたいと思います。

A氏 では、この続きは次回に。(了)